

81巻1号

2026年1月1日

YAA 天文会報

807号

(1~3月号)

〒226-0016

横浜市緑区霧が丘 4-1-7-402

正木 仁 方

Mail: masaki@e08.itscom.net

HP: <http://home.n03.itscom.net/yaa/index.html>

横浜天文研究会



Atlas彗星【C/2025K1】

撮影：山形幹夫

観望ガイド

正木

2026年が明けました。穏やかな一年になることを願っています。また本年もYAA天文会報へのご協力をよろしくお願ひいたします。

今年の主だった天象、主役はまず3月3日の皆既月食でしょうか、食の最大が20時34分と、宵のうちから欠け始め皆既月食の始めから終わりまで見ることができます。日本にとって最高の条件になっています。

流星群は、まず三大流星群は1月のしぶんぎ座流星群は月明かりの影響が大きいですが、8月のペルセウス座流星群、12月のふたご座流星群は月に邪魔されず好条件で見ることができます。しし座流星群は母天体のテンペル・タットル彗星の回帰が5年後の2031年に控えており、今後の活動が期待されます。

さて、1月はしぶんぎ座流星群となります。上に書いたように3日19時が満月になるため一晩中月明かりに邪魔されてしまい条件は最悪です。

元日新年を迎えると夜の鐘が鳴るころ、月齢11.6の月がプレヤデス星団に接近します。双眼鏡で見ると月と星団の星々を楽しむことができます。金星が6日に外合となり夕方の空に戻ってきます。春になると夕空に見えるようになります。

7日の未明にはしし座の α 星レグルスが月に隠される星食があります。東京では01時16分に月の明るい部分から潜入、02時20分に暗い部分から出現になります。九州の佐賀から熊本・宮崎地域では月の縁への接触になります。

2月は、3日23時45分にしし座 ρ 星(3.8等)の星食があります(東京出現時刻)。20日には水星が東方最大離角となります。19日から20日にかけて細い月が近くを通過していき、水星の近くには土星も光っています。20日前後は水星の日没時の高度が20度近くになりますから見やすいです。

3月、春めいてくる時期ですが昨今の気象状況だとどうなるでしょうか？
1月に引き続き2日にしし座のレグルスの星食が起こります。東京での潜入時刻は20時34分です。20日の夕空で金星と月齢1.4の非常に細い月が接近します。夕焼けの残る空での現象、写真の格好の被写体になります。

さて、3日にメインイベントの皆既月食があります。部分食が18時50分開始、皆既の始まりが20時04分、食の最大が20時34分(食分1.156)、皆既食の終わりが21時03分、部分食が22時17分終了となっており、日本からは非常に見やすい時間帯の月食になっています。そして今回の皆既月食はさほど本影の中心部には入り込まないので、逆に皆既中の色の変化が楽しみです。後はお天気に恵まれることを祈りましょう！なお次に日本から見ることのできる皆既月食は2029年元旦です。それまで時間が開くのでよけいに今回の月食は期待してしまいます。

それでは、皆さんにとって良い一年になりますように…

一年ぶりの天体写真撮影

山形幹夫

凡そ一年ぶりに天体写真撮影を行いました。昨今の異常気象による天候不良にはうんざりですが、当日は1年に1度と言える最良な星空でした。オーストラリアの星空を見たことで撮影に対するやる気が失せていました。オリオン座魔女の横顔は南北を倒立すると横顔に見えるのですが、如何でしょうか。

【本頁写真】IC2118 魔女の横顔 2025年11月22日 撮影地：入笠山

Nikon Z6 II FSQ-85EDP+0.73xレデューサー使用 f=330mm IS03200 30秒×30

【表紙写真】ATLAS彗星 C/2025K1 2025年11月24日 01h11m26s (JST) 撮影地：入笠山 Nikon D810A 25cmニュートン f=1000mm+コマコレクタ IS012800 30秒×5

ステライメージでメトカーフコンポジット、APS-Cサイズ程度にトリミング。本彗星は2025年に発見された中ではさほど明るくならないものでした。撮影時点で12等級程度。しかし核は分裂して話題となりました。掲載写真では露出時間过多のため核が分裂している状況は見えません。本彗星は移動速度が大変速く、僅か3分間の撮影でコンポジット後に恒星が流れています。このため撮影はノイズ影響が発生するのを承知上でカメラ感度を高めています。



日月星の伝承を訪ねて (86)

横山好廣

津久井の月待塔 ⑨

念佛講と関係があると思われる廿三夜塔二基と異色な銘文が施されている廿三夜塔一基を紹介したい。

(1) 所在地 相模原市緑区鳥屋 1461 地先 (旧・津久井町)

旧常念寺入口 道場(どうじょう)地区

調査年月日 2023(令和 5)5.22

形状 自然石 文字塔

名称 二十三夜塔

銘文 正面「廿三夜」

背面「文政十一年正月吉日」

(1828)

「上鳥屋村中」

法量 塔身 143×96+×37

台石 覆土のため測定不可



左隣に地蔵菩薩立像(造立年代・施主不明)が立ち、この地蔵菩薩像の左辺には「現受無比樂 後生清淨

土 念施主——」と銘文が刻されている。この文句は、

廿三夜塔

一遍上人語録にも引用されているらしく、念佛との関係が深いように思われる。素人判断であるが、この地蔵菩薩像はこの地域の念佛講によって造立された石仏のように考えたい。一方、本碑には「廿三夜」以外の銘文は刻されていないので、本碑から念佛講との関係を推察することは出来ない。ところが、すぐ側の住家の主婦に昭和 42 年 10 月



左・地蔵菩薩立像

の記がある手書きの念佛帖を調査の折りに頂戴した。この念佛帖は、この地域で念佛が盛んであったこと、念佛講の存在していたことを示唆するものである。また、道場地区には二基の念佛供養塔(文政 7 年と不明)が確認されており、念佛が盛んであった様を残している。なお、本碑の所在地、旧・常念寺入口の常念は『新編相模国風土記』によると、親鸞聖人の創立よるとあり、念佛と縁が深いことは容易に推察することが出来る。

以上、間接的な説明になってしまったが、本碑は念佛と関わりのある二十三夜塔であると考える。

念佛帖の次の二節が印象に残ったので紹介したい。「われらがおうじょう するときあきのみよなか つきのよに」。私には、この二節は二十三夜の月待に対する心情を表しているように思える。真夜中の二十三夜の月を拜し、その中に坐します阿弥陀三尊或いは勢至菩薩に来世の安樂・往生を願ったのであろうか。

件の主婦の話では、詳しい内容は伝わっていないが月待そのものは昭和50年代頃まで行なわれていたそうである。従って、恐らく二十三夜待と念佛講が同居・習合した形の行事であったのではないかと想像する。

(2) 所在地 相模原市緑区寸沢嵐 1849 道志館地区(旧・相模湖町)

調査年月日 2023(令和5)12.8

形状 自然石(子持岩) 文字塔

名称 二十三夜塔

銘文 正面「廿三夜」

造立年代・施主不明

法量 塔身 126×49×30

台石 13×50×30

何れも地表部の値

*背面はブロック塀が近く、測定や

判読が困難な状況、左右の側面に銘

文は認められなかった。

*子持岩---石老山系で産する礫岩。

子宝や安産の信仰対象になっている。

堂々とした風格の石塔であるが、頭部の損壊の跡は痛々しく、惜しまれる。

『郷土さがみこ』第二集には、本碑のデータとして「建立年月日 不詳 建立者 村念佛講」(P71)と記載されている。しかし、「建立者 村 念佛講」について確認できなかったので、『郷土さがみこ』第二集の記載を参考にして記述を進めることにする。

この銘文から推察すると、館地区では二十三夜待と念佛講が仲良く共存していたことが窺われる。念佛講が二十三夜待を主導していたようである。そして、念佛講の年間行事の中において二十三夜待は特に重く位置づけられていたのであろう。その結果、本碑・廿三夜塔は念佛講によって造立されたものと考える。

この付近で、念佛講に由来する石塔類が見当たらないのが不思議である。それだけに、二十三夜待の存在感が偲ばれる。



廿三夜塔

(3) 所在地 相模原市緑区寸沢嵐1707 道志南 清光寺境内

調査年月日 2023(令和5).12.8

形状 自然石(子持岩) 文字塔

名称 二十三夜塔

銘文 正面「廿三夜」

右側 「昭和九年五月日 当村南中山」

左側 「勲八4等桐葉章 奉納 大熊太一郎」

法量 塔身 140×66×34

台石 20×148×80

先ずは、本碑は叙勲に伴う奉納という点において異色な廿三夜塔である。叙勲された理由が不明なので、いたずらに憶測だけで考えを述べることは慎みたい。

唯、廿三夜に願を掛けて、それが叙勲という形で成就されたので、お礼に廿三夜塔を村の講中が建てるにあたり、奉納をしたことは間違いないことであろう。廿三夜の月に願を掛けるという行為自体は特に珍しいことではないのであるが、一個人の思いも刻した例はほとんど見かけない。



『郷土さがみこ』第六集には「これは明らかに再建されたものであり、この塔と対峙して刻記不明に風化した旧塔がある」という説明がなされている。小生の拙い調査では、本碑から離れたところに表面が摩耗し、刻字の判読できない石塔が一基あり、これが上記の旧塔に該当するものかと思ったが、この石造物に旧廿三夜塔と判断する決め手が見出せなかつたので、廿三夜塔からは除くことにした。

仮に、再建であったとすると、再建に至った理由には如何なることがあったのだろうか。普通に考えると、最初の建立から再建までの年数が短いような気がする。また、再建した旨の記述、年月日の刻が無いのも疑問である。

なお、叙勲の対象は勳功が著しい者とされ、戦死者に限らず、生存者が対象の時期もそうである。勲八等は「旭日章」の一つで、数多く叙勲されたそうである。

昭和一桁時代の太平洋戦争前夜の戦時色の濃かった社会を反映した廿三夜塔という印象を強く受けた。異色である。

天 象

正木

1月

水星:明け方の東天低空→21日外合、以降夕方の西空低空 いて→やぎ座

金星:6日外合、以降夕方の西空低空 観望困難 いて→やぎ座

火星:10日合 観望困難 いて→やぎ座

木星:10日衝 観望好期 -2.7~-2.6等 ふたご座

土星:夕方西天 +1.0等 みずがめ→うお座

3日 19h03m 満月

4日 06h しぶんぎ座流星群極大(条件最悪)

5日 17h23m 小寒

7日 レグルス食(東京:出現 02h20m)

11日 00h48m 下弦

19日 04h52m 新月

20日 10h45m 大寒

26日 13h47m 上弦

30日 クジラ座ミラが極大(2.0等)

2月

水星:夕方の西南西天、20日東方最大離角その前後が見やすくなる。 -1.2~-+0.2等
やぎ→みずがめ座

金星:夕方の西南西天低空 -3.9等 やぎ→みずがめ座

火星:観望困難 +1.1等 やぎ→みずがめ座

木星:夜半に南中 観望好期 -2.6~-2.4等 ふたご座

土星:夕方西低空 +1.0等 うお座

2日 07h09m 満月

3日 節分

4日 05h02m 立春

9日 00h48m 下弦

17日 21h01m 新月、南極地方で金環日食

19日 00h52m 雨水

24日 21h28m 上弦

3月

水星:7日内合、以降は明け方の東天 +2.0~-+0.4等 みずがめ座

金星:明け方の南東天低空 -3.9等 みずがめ→うお座

火星:観望困難 +1.1等 みずがめ→うお座

木星:11日留以降順行 観望好期 -2.4~-2.2等 ふたご座

土星:26日合 観望困難 +1.0~-+0.9等 うお座

2日 レグルス食(東京:出現 21h34m)

3日 20h38m 満月・皆既月食

5日 22h59m 啓蟄

11日 11h44m 下弦

19日 10h23m 新月

20日 23h46m 春分

23日 10h32m 海王星が合

26日 04h18m 上弦